
短編集――触れぬべき世界――百鬼夜行

ブラック?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集——触れぬべき世界——百鬼夜行

【Nコード】

N55200

【作者名】

ブラック？

【あらすじ】

——我ら時の流れに忘れられど、人の闇にぞ潜みけり——人の子よ、笑えや笑え、墮ちるまで——

ホラーを題材とした短編集です（；；A）

基本一話完結の物語。

——序曲“闇夜”（前書き）

どーもブラックす（；´Д´）

最初は前置き。

この物語をする上での登場人物について

ちょっと難解です

——序曲“闇夜”

——ひとつ手をだしや

畏れに触れて

やみの何処かで何やら笑い

——ふたつ踏み入りや

咎すら越えて

陰の何処かで何やら蠢き

——みつつかぞえりや

……………もう数える意味すらない。

（詠み人知らず）

……冷たい夜風が吹き抜ける……

人気の無い夜道には、生あるものの気配はない……

そう……、「生あるもの」は。

——闇の何処かで何かが瞬く——

生無きものは闇夜に消えた。

……人無き闇夜に眩きが聞こえた……

先見えぬ深い闇の世界から……

「これは人相容れぬ、我ら“ウラ”の物語……。」「
何かが暗い陰で囁く。」

突如、夜風と共に“闇”が集まり、人の形を成し始めた——

そのおぼろげなヒトガタは、その顔らしき場所に表現しがたい笑みを浮かべた。

その耳まで裂けた口から、ソイツは低くとも高らかに唄い始める…

………

「人の世に忘れられ、

時の流れに消え去れり。

されど我ら深き淵に在りて、

人の闇にぞ潜みけれ。

盛者必衰の理がごとく、

人の世の“ウラ”を成す者なり……………」

最後の言葉が闇夜に消えるようにソイツは消えていった。

黒い影の行方は誰も知らない。

何も知らぬ人間どもは底知れぬ夜に、ただ眠るのみ。

> i 1 3 2 8 9
— 1 3 1 3 <

——序曲“闇夜”（後書き）

どうでしたでしょうか（・・ω・）

登場人物は語り手としての“ソイツ”だけです

基本一話完結なので

ほかの人物は一話ずつ変わります（一回きり）

“ソイツ”が何者であるか、むしろ何なのかは物語を進める上で明らかにしたいと思います。

ではゆっくりですが頑張って投稿しますのでよろしくお願いします
（ ; A ）

——1章 “黒猫”（前書き）

更新（； ㇏）

駄文ですがお楽しみいただけたら幸いです。

— 1 章 “ 黒猫 ”

— 白い仔猫や

— 何して遊ぶ？

— 健気な尻尾をみせとくれ

— 若い三毛猫

— 何して遊ぶ？

— 走りて鼠 捕まえる

— 老いた黒猫

— 何して遊ぶ？

— 暗がりに居ないでこっちや来い………

（見知らぬ子供らの童歌）

都市圏郊外某所――

草木も眠る丑三つ時。

人は皆寝静まり、通りにはたまたまに車が走り去るのみで人の姿はない。

そんなすべてが夜の色に染まる時間――

……夜陰に光る双眼が瞬いた。

灌木の茂みの奥から出てきたのは漆黒の肢体。

妖しく光る眼を灯し、長い尻尾を揺らしながら現れたのは、1匹の黒猫だった――

黒猫は頭をあげ、通りの先を見通すようにじっと遠くを見据えていた。

その瞳に通りを照らす街灯の光が映る――

……ヒュウウ……

一筋の夜風が辺りを駆ける……

黒猫はくるりと翻ると、軽快に茂みの奥へと消えていった。

通りには何もいなくなった。

——否、通りには何よりも深い夜陰が残った——

都市圏郊外某所——

ある民家の一室——

ある男が非常に困っていた。

「……………どうしたことが……………」

俺は普通の大学生だ。

独り暮らしをしながら郊外の大学に通い、授業の後はアルバイトをして一日を過ごす。

ぼんやりしてなんとなく生きてる毎日だが、最近の若者なんざ皆こんなもんじゃないのだろうか？

そうして20年と少しを生きてきたわけだが、今日突然奇妙な事が起こった。

「……………にゃあーお……………」

今日の前にいるのは、真っ黒な猫。

俺が頭を抱えているのを見ながら、自分の頭に？を浮かべてるよう
なしぐさをする。

突然だった。

朝、眠りから覚めて寝室から出るとそいつはいたのだ。

どこから入ってきたのだろうか？

なんのことはない。

リビングの窓が開いていた。大方自分が閉め忘れたのだろう。

漆黒の肢体。ゆらゆら揺れる尻尾。
何より、その鋭い光を放つ双眼——

立派な雌の黒猫だった。

それにしてもおとなしい猫だ。

いやちがうな——おとなしいんじゃない。俺のことを何とも思っていないような興味無さげな目をしていた。

それでいてその眼には、なにやら妖しい雰囲気がある。

黒猫という固定概念だろうか、そういう雰囲気を感じるのだ。

そう思いながら黒猫を見つめていると

「……………にゃああお？……………」

……………こちらを見上げてきた。

何かを催促するように。

「……………？ ああ、そういえば朝食まだだったな……………」

そう。今は朝だ。俺は大学にも、アルバイトにも行かなければならない。

ふと時計を見るとそれなりにヤバイ時間だった。

——急いで作るか……

俺はリビングのテレビをつけてニュースのチャンネルに合わせると、朝食の用意を始めた。

「……さて次のニュースです。最近多発している……。県での連続失踪事件をつけて、。県警は緊急対策本部を設置し、……………」

一人と一匹が黙々と朝食を食べている部屋に、ニュースキャスターの無機質な声が響く。

テーブルでパンを食べている俺の足元で、黒猫は猫まんまを食している。

昨日の残りのご飯に同じく残り物のみそ汁をかけてやった。

最初それを用心深く見ていたそいつは、安全だと判断したのか今はむしろむしろ食っている。

「……………失踪者は××人にのぼり、関係者は——」ブチッ」

食い終わった俺は食器を流しに突っ込む（流しには昨日の食器が放置されたままだ。気にしない）と、無造作にリモコンでテレビの電源を切った。

時計をちらりと見る。

あまり余裕はないようだ。

黒猫はテーブルの下で丸くなっている。飯も食べ終わっていた。

「さてと問題はこいつか……………」

俺は一人呟いた。

そいつは眠っているようでピクリとも動かない。黒い毛玉と化している。

……まあ、放置しても大丈夫だろう。

何より時間がない。

俺はなんとなくそう思って、眠れる黒いカタマリに背を向けた。

急いで使いなれた鞆を手取る。

大学の始業時間を気にしながら、俺は家を飛び出た。

——奇妙な黒猫を残して。

——都市圏郊外某所、深夜——

疲れた。

もう深夜だ。

学業とアルバイトを終えた俺は、人影の絶えた道を疲労困憊しながら歩く。

家へと続く通りは一直線で脇に灌木の茂みが植わっている。

通りを吹き抜ける夜風は肌寒く、

投げかけられる街灯の光は無機質で目に痛い。

そんなことをぼーっと考えながら、俺は家路を急いだ。

ほどなく家の扉の前へと着いた。

——今日も“同じ”か……………

——繰り返される退屈な日常、

——標準と化した孤独な日々、

ため息をつきながら扉に近寄る——が、

——いや、いつもとは違うじゃないか。

ドアノブに手を掛けたところで気がついた。

今朝の黒い奇妙な訪問者の存在を。

——どうしているのだろうか？

——今朝、急ぎすぎてそのまま放っていたが逃げてしまったか？

気になりながら扉を開けた。

目の前に漆黒の闇が広がる……………

——カチッ

電気をつけた。

先が見えない室内に光が広がる。

玄関からリビングに入ると、キッチンに食器の山が出来ているのが
見えて顔をしかめる。

テーブルに鞆をおくと、足元に猫まんまを入れていた皿があるのに

気付かず踏んでしまった。

中身は入っていなかったので幸いだ。

リビングには探し人（猫）はいないようだ。

……やはりいなくなっただか……

決して広いとは言えない室内を見回しながらぼんやりと考えた。

——ふと家を出る前と違う点を見つけた。

閉めたはずの寝室の襖が、30cmほど開いていた。

闇深き寝室にさしこむ光の中に何か揺れるものがある。

——黒い尻尾。

おぼろげながらそれを照らす光のお陰で、あいつの物であろうしなやかな尻尾がゆらゆらするのが見える。

——何かにじゃれついているようだ。

俺はまだいたのかという面倒臭さを感じながら、どこかで安心感が湧くのを覚えた。

俺は寝室の入り口に近づく。

——何にじゃれついているのか？

寝室にはものがあまりない。

己の布団を引っ掛かれたら困るのだが。

好奇心に駆られて、ふすまの取っ手に手を掛ける。

右手で引いて開けると、まだ暗い室内に首を突っ込んだ。

後悔した。

「……おい？なにやってん……あっ、」

……。

黒猫は寝室をあとにする。

軽やかな動きでリビングに躍り出ると、

寝室を振り返った。

つまらなそうな、興味の無い眼をしていた。

黒猫は踵を返すと、鍵の開いた玄関の扉から出ていった。

……黒猫は、住人の——「いなくなった」——家から消えた。

猫が何もいないところを追いかけてじゃれているのは、

人には見えない“何か”を見ているからだ。

（――年老いたある老人の怪談、“猫が追う「何か」”）

――

……いるべき人のいなくなった部屋の陰で何かが揺らぐ。

闇から現れたのは“何か”は、おぼろげな人影を成した。

「全く………人はなぜ見ようとしないのか。

人は決して見えないものの存在を知りながらも、それを忘れ、記憶の奥底へと埋めてしまう……

そのくせ人はその“何か”に興味を覚えるやいなや、それを知りたいと考えてしまうのだ。

たとえそれが決して見えないもの

否、“見てはいけないもの”であつても。」

眩くような微かな低い声は誰もいない部屋に響く。

「興味を持つのは悪いことではない。

それが人の特徴。人たる所以だ。

だがそれが見えてしまったら、そこから先は我らが“世界”。

決して戻れぬ“夜”の世界だ。」

……黒い“そいつ”は禍々しい笑いを浮かべながら、闇へと消えた。

——一章“黒猫”完。

——1章“黒猫”（後書き）

どうでしたでしょうか（´・ω・`）？

猫には見えて、人には見えない“何か”。

猫は妖しい雰囲気を持っている。

そう思うのは私だけでしょうか？

まあ、犬より猫派なブラックの主張です（；´Д｀）？

出典、Wikipedia

怪談都市伝説の項

「猫が追う“何か”」より拡大解釈。

——2章“深淵”前編（前書き）

どうもブラックす（、・ω・）

ちょっと長くなってしまったので前編後編の二部に分けました
いずれ結合するかもしれませんが

さて、物語について

ある田舎の寒村の

冷たい泥の中から始まるお話——

駄文ですがどうぞ（；、）

——2章 “深淵” 前編

……………印旛郡、橘村名主、山村某がここに記す……………

——ある雨少ない年の四月。

畑が乾いている。

種を撒いたばかりだというのに、雨の無い日が三週ほど続く。

仕方ないので村の裏手にある「不忍池」から水を引く。

小さな池だ。

長くは続かない。

——雨の少ない年の五月。

結局この一ヶ月ほとんど雨が降らない。

不忍池の水は残り少ない。

村が祭る水神様の祭りを行うことが寄り合いで決まった。

雨乞いだ。

——雨の少ない年の6月。

梅雨だというのに雨が降らない。

否、曇っているのに雨は無い。
奇妙だ。

水神様の祭りは無事に終わった。

——雨の少ない年の6月、追記

夢を見た。

水神様の祠と対峙している。

祠の中から黒い影が出てきて話し掛けてくる。

“ 生け贄を捧げよ。 されば恵みもたらさん。
”

そこで夢から覚める。

黒い影は最後に笑いを浮かべた気がした。

——雨の少ない年の6月、追記

水神様に生け贄を捧げる。

村の孤児の娘が選ばれた。

私の息子がよく遊んでいた子だ。

忍びないが村のため。

仕方ない。

生け贄の儀式は滞りなく終わった。

——雨の少ない年の七月。

名主に代わり、若頭の不肖、私が記す

嵐が来ました。

村でも被害が出ました。

季節外れの大嵐です。

翌朝村の裏手に出ると大きな池が出来ていました。
みんな驚きました。

しかし名主様はどこへ行かれたのでしょうか。
昨日の晩に見たのが最後でしたが……

それから雨が普通に降るようになりました。

名主様は帰ってきませんでした。

（ある村の旧家の記録）

——深きわだつみの淵より

——水濁る泥の底で

……冷たい。

……苦しい。

……重い。

幾度となく繰り返される感情。
とうの昔に果てた躰。

ただその思いだけが其処に“在る”

真つ暗な世界。

私以外誰もいない。

この想いを知る人は居ない………

不意に何かを感じた。

孤独な真つ暗な世界に何かが居る。

「……………望め、その想いを糧に……………」

“そいつ”は見通せない闇の中で笑っている気がした。

……………嗚呼

私の心に何かが灯る。

ニクイ

ネタマシイ

アタタカクナリタイ

何デ皆ハ外デ、アタシハ此処ナノ？

何でアイツジャナクテアタシナノ？

教エテヨ……………

「……………その願い叶えよう、その業に免じて……………」

………暖かく、軽くなった気がした。

——田園地帯のある村。

「………都市部郊外で多発した連続失踪事件は 日の大学生の犠牲者を最後にぷつりと止んでいます。専門家によれば………」

………次のニュースです。××県印旛市橘町で。□日、帰宅途中の女子児童が何者かに連れ去られるという事件がありました。警察に大規模な搜索の結果、付近の不忍貯水地で水面に水死体が浮遊しているのを発見、同日中に女子児童の母親により本人と確認されました。××県警によると………」

………事件が起こった印旛市橘町では、近日中に名物水神祭の開催されており、警察による捜査が続いています。」

——ピッ

私はテレビのニュースが一段落したところで電源を切った。

「おじいちゃん、今年も水神様のお祭りやるんだよね？それとも今年は出来ないの？」

一緒にテレビを見ていた今年で七才になる私の孫は、心配そうな顔をしながら上目遣いで聞いてきた。

「ああ……水神様のお祭りは大切な行事だからな。滅多なことでは中止にはならん。安心して良いぞ。」そう言ってやった。

水神祭は約200年前から続く伝統だ。

途中戦争で一旦開催が途切れたが、戦後すぐの60年前に再び始められた。

私が10か11の時だ。

「わあーい♪やったあ♪今年も○×ちゃんと遊ぶんだ！」

私の言葉を聞いた孫は仲のよい友達の名前を出しながらニコニコ笑う。

「そうか、そうか、よかったな………ッ！？ゴホッ、ゴホッ……」
孫の頭を撫でながら言おうとした台詞は、突然の咳に遮られた。

「！？、おじいちゃん大丈夫！？」
驚いた孫が心配してくれた。

今年で齡、70過ぎとなる。我ながら自分の体を労ってきたつもりだったが、最近あちらこちらでガタが来はじめている。そろそろ年貢の納め時かもしれない。

——ドタドタッ

板張りの廊下を誰かが走ってくる。
間もなく襖が勢いよく開いた。

「おい！？親父大丈夫かつ？」

急いで駆け寄り、背中を擦ってくれたのは私の自慢の息子だ。
十数年前に結婚したこいつは今では一児の父となり、立派な親父と化した。

妻に先立たれた私はこの息子夫婦のところに厄介になっている。

「あ……ああ、大丈夫だ。心配かけてすまん。」

やっと落ち着いた私は掠れるように呟いた。

「ほら、おじいちゃん具合が悪いからママのところで遊んできな。」

「はぁーい」

息子は孫に言う。

——タタタタッ

軽快に駆けていく娘の足音を聞きながら、息子は後ろ手で襖を閉めた。

「……………なあ、親父。聞きたいことあんだがいいか？」
さつきとは違い、真剣な口調で話してきたので、私には息子が何を言いたいのかわかった気がする。

「……………何だ？」
無愛想に返してみた。

「最近噂になってるあれって、親父が昔に話してくれた人身御く——

「その話は無しだ。今はもう話したくない。」

やはりか……………。
思った通りの話題だった。

「——ッ！！ やっぱり親父はなんか知ってんだろ！？教えてくれよ——！」
年柄もなく興奮して騒ぐ息子に、私は冷静に言った。

「私が子供の頃に祭りが復興した。その時の雨乞いの儀式で雨が降った。村の娘が生け贄に出された。それだけだ。」

「——違う！！親父はもつと何か知ってるはずだ！！だってあんたは名主の子供だったんだんだ。だから——」

「——だからどうした？」

「——くそつ、もういい！！」

襖を乱暴に開けると、息子は出ていった。物凄い勢いで閉めたので大きな音がした。

（……………あそこまで必死なのも当然か…………）

水死体で発見された女子児童は私の孫、つまりは彼の娘と同年の子だ。

息子が心配するのも頷ける。

そんなことを考えながら、私は息子が乱暴に閉めた襖をぼんやりと

眺めていた。

——印旛市橘町山中——

——ピタッ、——ピタッ

私の躰から滴る、濁った水滴が延々と小さな音を立てる。

——サ
ム
イ

——サ
ビ
シ
イ

吹き抜ける外気は私の肌に突き刺さる。

黒い影にしか見えなかった“ソイツ”に助けられ、もう見ることはないと思っていた、「ソト」に連れ出された私は嬉しかった。

懐かしい風景。

少し変わってしまったけれど人の気配のする町。

——ただ、あの時に在って今はないもの——

孤児だった私と遊んでくれた“彼”は見つけられない。

——寂しかった。

だから貯水池のほとりで一人で遊んでいた小さな子を声をかけた。

——ネエ、

——アソボウヨ？

――何して遊ぶの？

――ミズアソビシマシヨ。

………その子はすぐに冷たくなり動かなくなってしまうけど、楽しかった。

――ダアレカサン？

――モットモットアソボウヨ。

次なる“遊び”相手を探して私は町に向かった。

町は大いに賑やかだ。

派手な神輿が町中の通りを練り歩く。

今年も水神祭りは無事開催されている。

辺鄙な片田舎のこの町にも、この時だけは多くの観光客で溢れるのだ。

通りを走り回る子供たちや昼間から酒を飲んで赤くなってる大人もいる。

通りの両側は屋台で埋め尽くされ、何やらしい匂いが漂ってくる。

人々も浴衣や甚平を着て縁日を心から楽しんでるようだ。

「お父さん、○×ちゃんと一緒に遊びに行っても良い？二人で行きたいの。」

人混みの中に孫は親友の姿を見つけたらしく、父親にそう言った。

「そうだなあ……………5時までには帰ってくるんだぞ。」

「はあーい♪行こつ、○×ちゃん！」二つ返事で了承されると孫は友達に呼び掛けて走って行つた。

太鼓と笛の音に合わせて、水神を模した山車^{だし}が進む。

色鮮やかな巨大な龍の姿は山の方に行く。不忍貯水池の方に水神様の本殿があるのだ。小さな社と祠があるだけだが、町の人には大事にされている。

孫とその友達の小さな背中を見届けて家に帰ろつかと思い始めていた私は突然悪寒を感じた。

視界の隅にいるはずの無い姿をちらりととらえたのだ。

ほんの一瞬。

目の大きさの目立つあどけない横顔。

少し長めに伸ばしていた髪の毛。

いつも着ていた藍色の小袖。

ほんの、ほんの一瞬であの娘は人混みの中に消えたが決して間違えることはない。

しかしいる筈がない。

彼女はとつくの昔に.....

「おい、ちょっと先行ってるぞ。」

「.....ん？ああわかったよ。ゴクゴク」

息子は仕事仲間と飲んでいるらしく、適当な返事を返してくる。

その姿に呆れながら別れを告げた。

向かう方向は家路ではなく、本殿。

遠い昔に失ったはずの彼女を探しに、私は老いた体に活を入れて人混みに身を投じた。

——2章 “深淵” 前編（後書き）

近いうちに後編を投稿します（ゝ・ω・）

主観がちよくちよく変わりますが分かりにくいようでしたら改善します（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5520o/>

短編集――触れぬべき世界――百鬼夜行

2011年10月7日12時43分発行